

佳作

夏休みに感動したこと

鹿児島県 川辺高等学校三年 西垂水とわ

私は今年の夏に、とても貴重な体験をさせて頂きました。私の親戚のおばあさんに第二次世界大戦の最中、特攻隊のお世話をした「なでしこ隊」の一員であった方がいます。そのおばあさんと、私の故郷が舞台となつてつくられた『僕は君のためにこそ死にいく』という映画と一緒に見ました。おばあさんは昔から私に戦争のことや、戦時中にあつた出来事をよく話してくれましたが、この映画を見るのは初めてでした。

「三角兵舎」や「富屋旅館」など、未だに知覧に残る建物が映画の中で出てくると、「本当に私が住むここ知覧で特攻隊が出撃していたんだ」と、強く思わせられる半面、少し恐怖も抱きました。

特攻隊で出撃をする方の多くは、私と同じ十七歳や十八歳の方がほとんどでした。たった十七年十八年生きた命が、戦争という悲惨なことによって奪われるのは、言葉にならないほど辛く悲しいことだと思います。出撃するときには、空を飛ぶ飛行機に乗る特攻隊員に向かって、

なでしこ隊をはじめ多くの人々が見送りをします。死ぬと分かっているながらも大勢の見送り人に笑顔を向ける特攻隊員の姿をテレビ越しに見る私の目からは大粒の涙がこぼれました。すると、一緒に映画を見ているおばあさんは、
「辛いよね。悲しいよね。真剣に見てくれてありがとうね。」

と、言いました。私は、その言葉にまた涙がこぼれました。

特攻隊で出撃した方の中には、出撃に失敗し、生き残って帰ってきた方が何人かいて、

「仲間達を裏切ってしまった」と、自分を責め続ける隊員がたくさんいました。

「死んだ人も生き残った人も可哀想だよね。」
と、おばあさんは私に言いました。

「でも、生き残った私たちだから出来ることは、戦争で思い知らされた悲しい辛いことを、あなたたちの様な若者に伝えないといけないよね。」

と、言いました。私は、私が知覧に生まれてきた理由が必ずあると感じました。時代はどんどんうつつり変わっていきませんが、だからこそ私たちと同年代の方が特攻隊で命が失くなったことや、日本が唯一の被爆国であることを絶対忘れてはいけないと思います。

そして、映画を見終えて、この映画の題名が『僕は君

のためにこそ死にいく』という意味がわかりました。映画のラストシーンで大勢の特攻隊員の方々が行進をしている場面がありました。その時に数人の隊員がこちらを振り返って私達に笑顔を向けます。その時の笑顔が私たち青年に「日本の平和を任せる」と言われている様な気がしました。

私たちが今、生きているというのは、戦時中に多くの兵隊が日本を守ったからだと思えます。そのことを忘れずに、今ある幸せはあたりまえではなく、一日一日を大切に味わいつくして生きたいと、強く思います。

私はこの映画を見ることができて本当に良かったと、心の底から思いました。私たちはこれからもっと戦争のことを学び、もう二度とこの様なことが起こらないように次の世代の人々に伝えたいと思います。それこそが、私が知覧に生まれてきた理由ではないのかと思います。

知覧には、特攻平和会館や富屋旅館で戦争にまつわる展示物や資料があります。また、毎年夏のお盆の時期には平和スピーチコンテストもあります。そこで色々と学べるように積極的に行ききたいです。

現在、日本はたくさんさんの社会問題を抱えており、例えば尖閣諸島問題や北朝鮮の核ミサイル問題など、挙げればきりがありません。特に北朝鮮の核ミサイルの問題はアメリカや韓国も共に悩まされる大きな問題の一つです。私はまた世界で大きな戦争が起こるのではないかと、

ニュースを見てゾッとします。私たちを空の上で見守る特攻隊員の方々の笑顔が怒りに変わる前に一早くこの社会問題が解決することを願います。